

〈やまところ〉からの心理学

— 公開シンポジウム『魂との出会いを語る』を終えて —

實川 幹朗 姫路獨協大学*

Toward a Psychology in *Yamatogokoro*:

After the Public Symposium “A Talk about Encounter with the Soul”

ZITUKAWA Mikirou

はじめに

この場を組んだ立場からシンポジウムを振り返り、学んだこと、考えたことを記しておく。

心と真剣に向き合えば向き合うほどに、これまでの心理学では及ばないと感ずる人が多かろう。「心理学バブル」とも言うべき膨張で、全国の大学や大学院が競って心理学専攻を作ったけれど、学問の質は危うい。本大会より一ヶ月ほど早い日本理論心理学会の大会は、心理学の未来を見限る立場でシンポジウムを開いていた。もう打つ手はないのだろうか。

私たちの学会大会では「心理学に魂を取り戻す」を題目に掲げた。心理学への疑いと建て直しの問いかけとを込めたつもりである。そもそもトランスパーソナルなる運動は、はじめにこの問いかけを織り込んでいたはずなのだ。ただ、わが国での取り組みは、新たな成果を急ぐあまり、自から問い直すよりもアメリカ西海岸からの輸入に力を入れすぎたのではないかと——姫路大会の大会長を拝命した私は、そう思っていた人物である。

心理学を作り直すには、聞いたことのない斬新な発想が欠かせないだろうか？——もしできれば、なるほど素晴らしい。しかし、望ましいのと出来るのとでは違う。振り返れば、すでに百五十年前の近代心理学の登場そのものが思想史の大事件なのであった。その後の乱れた歩みが大革新の難しさを語る。

実験心理学は「データに忠実」と言いつつ、あやふやなデータを数だけ積み上げ、細かな有意差を盾に「実証」を掲げてきた。臨床心理学はあれこれ思いつきの手法を並らべたうえ、偏った事例報告で治療成果を誇った。だが、広範囲の資料を異論なく説明できる理論も、また確実な心の治療法も現われはしなかった。いずれの試みも空しかったが、日本の心理学はその時々の「最新の」学説の輸入に忙しく立ち働いてきたので、研究が進んだとの印象は作り出せた。しかし、もはやメッキは剥がれかけているのだ。

ならば、足許から見つめ直すべきではないか。新たな心理学はむしろ、私たちの馴染んだ暮らしの土台から得られるのではないか。そこから出来合いの学説を照らし返してこそ、かえって新しい眺めが開ける——〈やまところ〉の心理学を開きたい。大会初日の公開シンポジウム「魂との出会いを語る」は、そうした思いから編んだのであった。

* 〒670-0896 兵庫県姫路市上大野7-2-1
zitukawa@gm.himeji-du.ac.jp

私たち日本人は、他のすべての国、地域の人びとと同じく、かつて魂と親しく付き合ってきた。魂は、生身の生き物でないが、少なくとも差し当たり個別の何かで、それぞれに考えや好み、都合がある。神、仏、精霊、人霊などに類い分けでき、それぞれにまた多くの種類から成り、人との出会い方にも様ざまある。ただ、生身の生き物と違うのは、ふつうに目覚めているときよりも、夢や幻を通しての出会いが多いところだ。

世界中どこでも、かつてはそれが当たり前なのだった。ところが「近代化」とともに、ほとんどが「迷信」や「虚構」に括られていった。近代の申し子に他ならない心理学でも、主流においては魂が姿を消してしまった。魂を語る心理療法があれば、いかがわしい「エセ療法」と決めつける。魂に出会う人がいれば、むしろ病まいと見做し、治療の無理強いをさえしてきたのだ。

それでよいのだろうか——心理学や精神医学は、そんな決めつけができるほど確かな治験を得たのか？ わずか二三百年の近代を除いて、人類はずっと「迷信」と「虚構」のうちに生きてきたと言い切れるのか？ — — —

魂の有り様は、なるほど「科学的に」明らかになっていない。しかし、「存在しない」と証明されたわけでもないのだ。それなら、霊魂を心理学から外すべき理由もまた、有るはずがない。

0 〈やまとごころ〉の魂

眉を顰める人が出る覚悟で始めたシンポジウムだったけれど、登壇の方々からは、それぞれ余人に代えがたいお話が伺えた。指定討論の石川学会長の言葉にもあったとおり、私たち日本人が霊魂・神仏などと暮らしの中でどう付き合ってきたか、また今もいるかについての、生々しい現場の手応えからの語りで、なおかつ

しっかりした見通しを伴っていた。まさしくこれが、〈やまとごころ〉に見る魂の有り様である。

その有り様を無理やり一言にすれば、神聖視して異次元に置くのでない〈身近な対等の繋がり〉となろう。霊魂・神仏などと直かに親しく交わり、やり取りするのだ。すると病まいが治ったり、報らせを受けたり、不思議な事も起こる。ただしそれらは、当たり前前の暮らしをかけ離れた出来事ではない。なるほど不思議で有り難いが、特別な「奇跡」でもなく、むしろ暮らしは日々そのように回っているのだ。だから霊魂・神仏などを尊びはしても、ことさらに崇めるのでなく、助け合う〈お互い様〉の相手方となっている。

さらなる無理やりとなるが、魂との付き合いの特色を箇条書きにしてみる。

- 1 魂と直かにやり取りできる（「象徴的」な儀礼が必須でない）
- 2 魂はこの世に当たり前前に働きかける（異次元の「超越者」ではない）
- 3 魂は物体・物質とともにある（「非物質」の精神ではない）
- 4 魂と人は対等である（崇めも見下しもしない）

差し当たりこれらを、〈やまとごころ〉の魂を考えるために外せない、大切な点と考える。とはいえ、せっかく書いてみたものの、たいへん詰まらないとも感じざるを得ない。なぜなら、四つとも日本では広く見受ける有り様で、まったく当たり前前のことを、わざわざ言わねばならないからからだ。

多くの日本人にとって長いあいだ言わなくとも分かり切っていたこと、明治からこちらの「近代化」のため揺らぎが出ているのは、まさにそこなのだ。「近代」の歩みとともに、キリスト教の考え方が広まってきた。「近代化」とは、ほとんどその動きに重なるものだ。なるほ

ど、この宗教の名前は必ずしも表立たない。頑固な科学主義者なら、キリスト教を表立って攻撃する。それでも、西洋文明を育ててきた教えの数々は、「客観」を旨とする学問にこそ染み込んでいる。このため「人類普遍の原理」と宣伝され、それを広めることが「近代化」と呼ばれてきたのだ。

霊魂・神仏との付き合いを扱うには、比較宗教学がものを言う。この学問もまた、キリスト教こそが最も進化した宗教との僻目から出来上がり、今もそこから抜けきれていない。その立場が文化人類学、社会学など隣り合う学問に力を及ぼしている。もちろん心理学にもである。こういうわけで、うっかりすると日本人自らが、学問的になろうとするあまり、キリスト教の枠組みで己れを捉えてしまうのだ。

〈やまごころ〉の魂をめぐる四項目はいずれも、そうした偏りに陥らないための注意書きになっている。次章から登壇者の方々のお話をこの四項目に添ってまとめてみるが、まず改めて、登壇順にお名前と、お招きした理由を記しておく。

吉村哲明さんは精神科医で、大学教員でもあり、青森県の津軽で霊性に配慮した医療を実践されている。この地域には、土地に根付いた「カミサマ」と呼ばれる宗教者がいて、その振る舞いは日本の古い魂との付き合い方を伝えている。吉村さんは近代医学の知識と方法もお持ちだが、ここは「カミサマ」に成り代わって古代の息吹を伝えていただこうと考えた。

渡辺順一さんは金光教の羽曳野教会長である。金光教は江戸時代の末に生まれ今にまで続く言わば「老舗の新宗教」である。渡辺さんは社会活動を含む実践の傍ら、教史の研究もされている。明治以降の近代化の中で、日本人の魂との付き合いがどのように変わり、また受け継がれたか、事例を交えてお示しいただけると考えた。また金光教本部は姫路からほど近いの

で、「ご当地材料」でもある。

太田宏人さんは曹洞宗僧侶の著述家だが、世界を股にかけ、医療現場と被災地でメンタルケアを実践されている。ご自身では二度の臨死体験を経られた。また「ペット供養」という、いかにも当世風の魂の業も行なう。こうした多彩な経験の中から見えてくる日本人の、現代における魂との付き合い方をお教えいただこうと考えた。

立石光正さんは修験道の行者で、国内外の旅や厳しい修業の中から多くの霊的体験を重ねた末、自から「山学道」を始め、修行者を指導されている。修験道は、わが国の古い山岳信仰を仏教や道教を採り入れつつまとめており、近世に絶大な影響力を持っていた。今も日本人の心の隅で眠るその力を呼び起こしていただきたいと考えた。

加えてもう一方、京都大学教授で神道学、比較宗教学の研究者・鎌田東二さんをお招きしていた。快諾いただいていたのだが、直前に大切な方の葬儀が出来し、お越しいただけなくなった。

1 魂と直かにやり取りできる

魂との付き合いでもっとも生々しいのは、直かのやり取りができる場合だ。今のわが国でも数多く起こる事柄で、ここを省いて魂は論じられない。だが翻って、いちばんタブーに触れそうな、危ないことでもある。ことに学問では概ね「迷信」扱いとなっており、批判にも及ばないとばかり、始めからここを避けているのだ。

近代の思想は、〈心の囲い込み〉を進めている。心は個々人の「内面」に閉ざされていて当たり前と考えるのだ。神仏や精霊、死者などの魂を語るとなると、「心の問題」となりやすい。そこで、ふだんは見聞きできず、どこにあるか

も分からないから「個々人の内面の思い」に他ならないと纏める——これが安全というものだ。もしそれらと直かに触れ合ったとなれば、近代の世界の土台を揺るがすからだ。

しかし何より、この危ないことを明らさまに語る場をこそ、私はシンポジウムに設けたかった。登壇者の方々はこの思いに、各おのの生き様から応えてくださった。

吉村さんの事例・津軽の「カミサマ」Kさんは、子供の頃から夢で「天の神様」に教えを受けていた。独り立ちしてからも神や霊鳥の姿が見え、神の働きで手が動いて字を書く。すなわち、神霊と直かに生身で行き来し、教えを受けているのだ。

また、かつてこの地方の海沿いには、狐に魚を供え、食べ方で漁を占う慣らわしがあった。この占いは、靈魂とのやり取りと見てよからう。獣の霊なのか、狐に憑いた神の霊かは分からないが、人間の計らいをはみ出す事柄に、魂の働きを読み取るのだ。姿が見えたり声が聞こえたりなら、いかにもそれらしい魂との繋がりだが、少し杵を緩めてよいとすれば、説明の付けられない出来事を介する付き合い方もあろう。占いの意味付けを、魂の働きに引き寄せて考えるのだ。

渡辺さんは金光教という、かつての日本人の暮らしから湧き出た「土着性」の強い宗教での、魂の動きを紹介された。まず、教祖の活動した明治時代までと、教祖を知る布教者の生きていた大正の始め頃までは、どの教会でも神の声を聞いて相談を受けていた。後にはそうした体験のない神職も増えたが、病氣直しなどには神の魂の働きが感じ取られた。神職が型通りの作法に従っても、それにより魂が動くのなら、ただの「象徴的儀礼」とは異なる。

ただし戦後になると、近代的合理性を重んじ、神との直かのやり取りを避ける向きが強まった。村上重良などの宗教学者が金光教の

「近代性」を持ち上げ、その流れを受けてのことだった。とはいえ布教のじっさいでは、相談者の求めに応じ、あるいは偶さかの成り行きから、魂の働きの表われが見取られていた。神の声や姿には必ずしも触れないけれど、直かの繋がりを見てよからう。

太田さんのお話には、魂との不思議な直か触れ体験は出てこない。しかしペットの供養で、依頼者たちはボロボロ泣き、お盆に「帰ってくるんですか」と尋ねる。見聞きなどの体験はなくとも、そうしたい気持ちの動きなら、ありありと伝わってくる。またペルーの日本人が仏壇で先祖に語りかけると、現地のキリスト教徒は「幽霊と話をしている」として気味悪がると、後の討論で話された。これも〈やまごころ〉の、魂との近さの表われであろう。

立石さんのお話のはじめに、人間は五大からなり、その五大が大日如来をも作りなすと説かれた。真言密教から入った教えだが、神仏が人間と同じもので出来ているなら、触れ合いも当たり前となる。「何宗でなく、繋がれば直ちに行者」とは、魂との出会いを重んずる立場をはっきり打ち出した言葉であろう。じっさい修業中に、怪我や病まいが即座に癒え、神仏、菩薩との繋がりを体験されているのである。

2 魂はこの世に当たり前に働きかける

これらの事柄はなるほど有り難いし、不思議なことだ。つまり理屈で説明の付かないことなのだが、しかしまた、ありふれてもいる。すなわち、有り得ないことが特別な事情で起こったのではない。むしろ私たちの日々の暮らしは、じつはこれらの不思議が支えているのだ。このことに気付いている人びとが、かつてはたくさんいたし、今もいる。「深い悟り」などでなく、当たり前の心得としてさりげなく知っている人びとが、不思議に助けられつつ、かつその不思議

議な営みを支えているのだ。

吉村さんの語る津軽の「カミサマ」はふつうの人で、家には看板も出ていないし、まったくふつうの暮らしをしている。主婦だったり、田畑を耕したり、小売り店で働いたりする人が、たまたま神の教えを取り次ぐのだ。謝礼の金額は訪れる人の評価で自づと決まり、「聖なる神」の命令などではない。

受け取った金の使い道も同じである。私の調べた他の地域の「霊能者」からは、法外な金額をふっかけてぜいたくなどしては力が落ちる、との話をよく聞いた。自戒の言葉と他の同業者への評価とを含んでいる。おそらく津軽でも似た事情なのだろう。「あがった賽銭でお礼参りをせよ」と神から言われ、全国を参拝したカミサマもいたという。神霊の指図なのだが、それが普通の人からの評判と繋がっている。

渡辺さんの金光教には、教会を継いだものの神霊との出会いの無い跡取りがいる。かつてその一人が教祖に教えの受け方を尋ねると、「そんなものは無い。聞こえてこなければ出任せを言えばよい。誤っていれば神が直してくれる」との答えだった。人間の出任せが神の言葉になる。見方によっては、神の桁外れの力が人間を支配する、とも受け取れよう。しかし、まずは「出任せ」なのだ。人間の右往左往に寄り添うくらい近さを、神の力は備えているのである。

キリスト教でも、不思議な出来事の起こることは認める。ただ、この宗教の解釈では異次元の「超越者」たる神の力による。だから暮らしとかけ離れ、仕組みは思いも付かないから、「奇跡」としてひたすら崇めるのみだ。また「聖人」や「福者」など、神のことさらに選んだ別格の人だけが関われる。近代の宗教学はこの枠組みに縛られているので、気をつけねばならない。

太田さんと立石さんのお話で、そのことがさらに明らかとなる。ペットはもちろん異次元の「超越者」などでなく、ともに暮らした家族に

他ならない。死んでからも同じで、「ステージの高い霊体」になるわけではない。それでも時空を超えて「帰ってくる」のだ。修験道では、大日如来を成り立たせる五大が人間の体をもまた造り成す。それなら如来の力が人間に及んでも、驚かなくてよい。有り難くはあれ、当たり前のことなのだ。世界の成り立ちに「超越」を持ち込まない限り、魂を語っても「奇跡」を信ずるとか信じないという話にはならない。

立石さんは質疑の中で、「歩くことのスピリチュアリティはなにか」との質問に、「そんなものは無い」と一刀両断した。そして「歩くとはただ歩くだけ。砂漠を歩いたときは、ひたすら水を求めていた」と説く。説明を求めて異次元の高みを加えようとの動きを、ピシャリと封じ込めたのだ。それでも、出会うべき時には不思議に出会い、生かされてゆくのである。

3 魂は物体・物質とともにある

靈魂の受け止め方は近ごろ、ややもすると〈精神主義〉になりやすい。ことに「インテリ」はそうなりがちだ。魂の世界は「穢れた俗世」の物質と異なり、もっと「純粹」で美しいと考えたくなる。しかしこれも、キリスト教が異次元の「超越」を精神の理性に求め、その精神を「非物質」と言い立てる流れに棹さしている。あるいは原始仏典や上座部仏教の解脱に重きを置く立場が力をつけているのだ。

しかしながら、その捉え方では日本の古くからの、また今も確かに息づく〈やまごころ〉の動きを逸れてしまう。魂にことさらな「超越」を構えない限り、その在りかもこの世の物事のところに収まるはずだ。私たちの魂は、人間の体を含む物質の世界から、離れてはいない。

修験道の五大の有り方が、ふたたびこれをくっきりと示す。五大から成る大日如来は宇宙の秩序そのものだから、私たちの体や山川草木

の物質と異なるところがまるで無い。なおかつ立石さんは五大を、「見えない世界」とも語ったのだった。なるほど身近な物質に違いないが、働きには隠れたところがある。だから有り難く、不思議なことも起こる。しかしそれでも、物質を「超越」した何かが働いたのではないのだ。

ペルーで亡くなった日本人は遺髪、爪、墓の土などを古里に送って葬った。魂が非物質の異次元にあるなら、物質で出来た遺体などどうでもよいはずだろう。しかし、日本人にとってはそうでなく、物質を送ってこそ魂も帰れるのだ。しかし、ペルーの人にはこれが伝わらない。そのため寺の管理人が知らん顔で、別人の位牌を出してきたりする。〈やまごころ〉を備える太田さんは、それではいけないと、位牌の仕分けに尽くしたのだった。

金光教の神職たちは、患者の体に土を塗ったり、一緒に風呂に入ったり、出来物を舐めたり、お神酒を口に含んで吹きつけたりした。これで病まいの治る場合があるのだ。科学的に見れば、土や風呂の湯、唾液や酒に薬効のあるはずはない。だから不思議に違いないが、いきなり「奇跡」が起こるのでもない。やはり体を共にし、物質を用いればこそ魂は働くのだ。渡辺さん自からも、依頼者の病まいに絡んで車にはねられ、大怪我を負ったのだった。

津軽の「カミサマ」Kさんでは、神の働きが肩から入ってくる。依頼者の住所を聞けば、昔何が起こったか芋づる式に分かるという。Kさん自からは、沼地で生まれたので龍神との結びつきが深い。依頼者の体をさすると、憑いている霊の声が聞こえてくる場合もある。いずれでも魂の働きは、体や土という物質と共に有るのだ。

魂が体をはじめ物質・物体と共に有れば、働きもそこに表われやすい。また依頼者となる人びとも物質・物体での働きを求める。「現世利益」の熟語が当てはまるのはここだが、しばしば「迷

信」と決めつけられ、学者の多くは蔑みを以て語る。けれどもこれは、僻目である。蔑みの底には、特定宗教の立場に過ぎない「純粋で非物質的な精神」への憧れがあるのではないか。

イギリスの金光教会では、壊れた電子レンジに神米を貼り付けたら直ったと報告する信者がいたという。ところが聴衆は、これに反応無しだった。かの地では日本の宗教の信者たちも、キリスト教プロテスタントの作る雰囲気から逃れられないのだ。

日本人の魂は、天国や極楽に行きっぱなしでなく、必ず戻ってくるべきものだ。だから、ペルーからでも日本に戻そうとする。ここで戻る先はといえば、私たちの当たり前暮らしの世界なのだ。そのときには、私たちの体を含む物質・物体の有難さが素直に感じ取れるし、「現世利益」を、貶めたり恥じたりする気にもなれない。

4 魂と人は対等である

生身の暮らしで直かに付き合えるからには、神仏であれ位は高くない。「日本人の付き合い神仏は位が低い」と言いたいのではない。そう聞こえるとすれば、高い低いで順番を付け、高さを競う構えがあるからだ。高くないとはただ、高みから見下ろしたりしないということに過ぎない。〈やまごころ〉は、生身の人間にも靈魂にも、上下、高低の序列を付けたがらないのだ。「上から目線」が嫌われるのと同じことで、「素直な平等主義」と呼んでもよからう。

「カミサマ」のKさんは、靈魂が「ちゃんとやって欲しくて出てくる」と語る。あちらは「超越」などしていないから、もの欲しげなところがある。それを人間に気付いてもらおうと、報らせを送っているのだ。人間に障りが出るのは、神仏が困っているからだ。だから靈魂を「ちゃんと」整えてやれば、流れが及んで人間も助かる。

「崇」の字のとおり、出でて示しているのだ。高い「超越」の神が「絶対」の立場から下す罰ではなく、むしろ神仏が人間を頼ってきている。だから報らせと祀りのやり取りは、〈お互い様〉で助け合う営みとなってゆく。

日本人は祖先を大切に思うので、盆や彼岸に祀り供養する。「祖先崇拜」との用語で呼ぶ場合があるけれど、これも僻目である。大切にすることからといって、崇め奉るとは限らないからだ。重んずるなら「崇拜」だとの見方は、「絶対的超越神」の立場からの横やりに他ならない。

吉村さんはのちに私信で「カミサマが人々の生活を支え、人々がカミサマの活動（神仏へのお礼参りや自身の修行）を支える」との見解をお伝えくださった。「カミサマ」に資格試験や免状はないから、本人の自覚と、世間からそう認められることで成り立っている。カミサマは、人と世の中との自づからの働きにより産まれてくるのである。

ペットの霊を涙で迎えるのは、犬猫などを「崇拜」するからではない。「霊体になって救いをもたらす」からお盆に帰って欲しいのでもない。生きてるときと同じく、懐かしく愛しいだけなのだ。もちろん、貶めるわけでもない。なるほど仏教には、動物を「畜生」と卑しめる教えもある。日本にも入っているが、討論の中で太田さんは、供養でそう言えば依頼者に怒られると説いた。身近な横の繋がりなので、上下の値打ち付けを伴う六道輪廻を説いてもピンと来ないのだ。だから、「畜生」の入った観音経は唱えられないという。

靈魂が生身よりも上位とは限らない。動物が神となる場合もあるが、それでも「崇拜」は当てはまらない。津軽の龍神は、頭の上に家を建てられたと憤る。絶対神なら「冒瀆」に天罰を下しそうなものだが、龍神の言い分はどうもじめじめと、恨みがましい。供養されないで「食うものも着るものもない」と恨み言を伝える淋

しい祖先もいれば、引っ越しをしたのに挨拶がないと僻む稲荷神もいる。「上から」ではないが「下から」でもない、「似た者同士」のやり取りなのだ。

崇るのは「冒瀆」への罰ではない。靈魂の世界に乱れが出ているので振る舞いを改めて欲しいとの、人への頼みごとに他ならない。だから、きちんと祀れば赦してもらえる。「超越」の高みから救うのでないのと裏表に、滅亡の厳罰を与えるわけでもないのだ。したがって、罰を恐れての絶対服従・隷属も、また有り得ない。津軽のKさんに言わせれば、「神仏霊は人間と団体」なのだ。

キリスト教の立場では、彼らの「神」と違うものを祀れば、変なものを「崇拜」と映る。このため〈やまごころ〉の魂の祀りは、「悪魔崇拜」と見做さざるを得ない。「悪魔」と契約して助けをもらう代わりに、命令に背けばひどい罰を被るに違いないと同情するのだ。そこで「悪魔から解放」してやりたくなり、押し付けが始まる。けれどもこの誤解は、キリスト教などの説く「最後の審判」での永遠の呪いを映し見たものに過ぎない。それが植民地侵略や土着の祀りの弾圧に言い訳を与えてきたし、今も「普遍的価値」の押し付けが続いているのである。

金光教は「神も助かり人も立ち行く」との教祖の言葉を伝えている。〈お互い様〉だが、まず神が助かって、それから人の暮らしも立ち行くのだ。修験道の「五大」が天地万物にも人間にも染み透るからには、本尊に手を合わせるときも、「上の方」を崇めるのではない。日本の靈魂の祀りは、宗教・宗派の形になっても、多くの場合に対等の〈お互い様〉を保つのである。

5 「宗教」でなくてよい

シンポジウムを糸口に、〈やまごころ〉の魂を色づける四項目を語ってきたが、ここでも

う一つ、「宗教」との係わりを考えておこう。霊魂・神仏と言えば、たしかに宗教が絡みやすい。ところで、「宗教」とは何だろうか。シンポジウムに出てきた霊魂の話がすでに宗教だと思える人もいるだろう。しかし比較宗教学や文化人類学は、「宗教」をもっと狭く捉えている。

これらの近代学では、宗教を「呪術」から隔てるのだ。敬い崇める心がけで宗教が成り立つのに比べ、「呪術」は人間の欲得を叶える手だてとの位置づけになる。したがって、神仏・霊魂と係わるからといって、直ちに「宗教」とはならないのだ。「宗教」は概ね、崇拜対象があり、礼拝施設を備え、礼拝・儀式の作法が決まり、教義と教団組織を調べて布教活動を行なう団体だとされる。少なくとも、そうした有り方をもっとも整い進化した形と見做す。日本の宗教法人法がこれに基づいた条文となっていることから、浸透具合の深さは知れるであろう。

このたびの登壇者の方々からは、しかし、宗教の長所のはずの教義と組織について、用心すべき面が多く出ていた。教義は説明の理屈なので、霊魂・神仏との出会いそのものを歪めがちだし、組織は、出会いの体験を欠く人にでも地位と権威を与える。このため、何より大切なはずの霊魂・神仏との間に隔たりが生まれやすいと言挙げが、げんに宗教教団に属する方々からも出たのであった。

戦後の金光教の歩みに力を及ぼした宗教学者・村上重良は共産党員で、マルクス主義を奉じていた。おそらくこのため、神との直かのやり取りや病氣直しなどの「現世利益」に値打ちを認めなかった。「科学的」に説明の付かないことは、「発展段階」の低い観念論と見做したのだろう。当時の教団の指導層がこの考えを受け入れたため、金光教の営みは大きく変わったのだった。

「迷信」から遠ざかる「近代化」で、「インテリ」の受けはよくなった——が、良いことづ

くめでもなかった。日々の暮らしから普通の人の立ち上げたこの宗教の取り柄を、奪ってしまったからである。教団がその後、一律にこの向きを強いなかったのは幸いであった。金光教は「地方分権」の趣きが強く、各地の布教者がそれぞれの考えで動いても無理に止めないという。このため渡辺さんのように、かつての魂とのやり取りを取り戻そうとする人も出てこれるのだ。

太田さんは曹洞宗の僧侶である。だが、このたびのお話は宗派と離れた立場でいただいた。教義からすれば、シンポジウムで出た話のほとんどは、取るに足らぬ「魔境」に入ってしまうであろう。そのあたりを心得つつも、宗派の縛りを越えて動くからこそ、様々な場面で心打つ稔りが得られている。

津軽のKさんは、あちこちの神社仏閣に参拝する。また依頼者の事情に応じ、祈祷などを受けるよう勧める。神社仏閣のほとんどは、どこかの宗教団体に属する。ところが、Kさんはどこの宗派にも帰依しておらず、それゆえにこそ、しがらみ無く依頼者のためを思って助言ができるのだ。すると神社仏閣の方でも、宗教・宗派の教義にこだわらず依頼を受けてくれる。

Kさんの病氣治しなどは、宗教儀礼とは異なる。そのつど神仏に教えられて行なうのであり、教義で決まった作法や「象徴」を通し「霊魂と出会ったことにする」のではないからだ。その動きが、宗教に属する神社仏閣の神職・僧侶らをも動かしている。ふつうの人の振る舞いが、固まった宗教をほぐし、立石さんの言う「繋がれば直ちに行者」を、すなわち宗派や理屈にこだわらない流れを作り出しているのだ。

むすび——「現世利益」を見直す

「現世利益」を導く振る舞いは「呪術」と分類されやすい。つまり「宗教」とは異なった、

一段低いものと扱われるのだ。シンポジウムで出た話の多くがそうなるであろう。宗教が「呪術」を遠ざけると、「呪術」は人間の欲得を叶える手だて、「誤った科学」と見做されている。本来なら科学ですべきことを見当違いのやり方で試みる、遅れて劣った振る舞いとなるのだ。

近代の学問において病氣直しなどの扱いが軽くなるのは、この仕組みによる。まともに語るなら「いかがわしい迷信」と扱う他なく、採り上げる場合でも、「思い込み」の社会的機能だけを考える場合がほとんどなのだ。このとき、魂の働きによる「現世利益」は、そのものとしては【無かったこと】にされている。

わがトランスパーソナル心理学／精神医学も、この流れに棹を差す。生きた人間とは異なる個別の靈魂を、なかなか認めてこなかったからだ。ましてそれらとの付き合いで、何かこの世界で形あるものが得られるとは考えない。なるほど、普通の個人には留まらない心を探ってこそそのトランスパーソナルだが、あくまで個々人の境地を深めて越えようとする。境地の深まりとともに「ステージ」が上昇し、「粗大な物質」を離れて繊細で清浄な有り方に向かう。

「俗世での物質の変化」などつまらぬとの見方は、ある種の〈精神主義〉に他ならない。いくら立派に見えても、いや、立派さを押し立てればなおさら、偏りだと言える。トランスパーソナルの運動を導いたアメリカ西海岸の動きは、これまでのキリスト教を乗り越えようと努

めてきた。しかし、仏教など東洋思想の理解が〈精神主義〉に傾くのは、批判しつつもまだキリスト教に捉われているからだ。

明治よりこの方、わが国にも西洋経由の仏教理解が及んでいる。このため、日本の大乘仏教よりも南伝の上座部（テーラワーダ）の方が、釈迦の「本来の教え」を伝えるとの受け止め方が広まってきた。ことに加持祈祷など「現世利益」に繋がるものを軽んじるのが「インテリらしいスマートさ」となるのだ。トランスパーソナルも、この動きの中にある。

研究の立場はいろいろあってよく、もちろん〈精神主義〉をもむげに拒むべきでない。しかしそれなら、このたびのシンポジウムで見受けた「現世利益」もまた等しく認めてゆくべきであろう。日本人が長らく親んだ〈やまとごころ〉であり、今もなお多くの人びとの心の拠り所となっているからだ。

トランスパーソナル心理学／精神医学はアメリカ西海岸で始まった。彼らは彼らの立場で、日本を含む東洋から、様々な考え方を取り入れたのだ。しかし私たちは、この国に暮らす日本人である。私たちの研究が、私たちの足許を外れて出来るはずはない。心理学が、心のじっさいのあり方を研究する学問なら、なおさらここを避けるわけに行かないだろう。多くの日本人が大切にしている〈やまとごころ〉の魂のあり方を、近代合理主義の解析に掛けて中身を消してしまうのでなく、そのままの姿で学問の世界に組み入れたいと私は願う。